

『早大日本語教科書 上級Ⅰ』

## 第24課「細雪」の分析

坪 井 佐奈枝

キーワード

長編小説 見合い 花見 短歌 谷崎文学の特質

雪の降る様子を「粉雪が舞う」とか「あつ牡丹雪だ」と言うことはあっても「庭に細雪が降りしく」というような文章に出会ったことはない。集英社の国語辞典には「〈文章〉細かに降る雪。また、まばらに降る雪」そして次の項に谷崎の小説『細雪』の説明がある。谷崎の作品にあまりなじみのない人でも「ささめゆき」と読めるほどこの小説はポピュラーである。講談社インターナショナル1979年刊の『近代日本文学翻訳書目』によると、1957年に「The Makioka Sisters」という題で Seidensticker によって翻訳された。その後フランス語では「4人姉妹」、イタリア語ではほほ細雪と同義の「Neve sottile」のほかはドイツ語、スペイン語、スロバキア語、セルビア語、チェコ語も「蒔岡姉妹」となっている。

これまで筆者は上級教科書の「外来者」と「伊豆の踊子」をとりあげ、分析を試みた。「外来者」は熟読玩味に値する緻密な文章で、一字一句の分析に堪えるものであった。「伊豆の踊子」に同じ分析をしても意味がなく、いわゆる「新感覚派」といわれる理由を表現から探り、教科書の抜粋部分を理解するのに「社会的な身分差」がキーワードとなる、という二つの視点から分析した。

「細雪」の編者の、学習上のねらい・内容紹介に「谷崎潤一郎の代表作。関西の旧家の四人姉妹の家庭生活に年中行事を織り込んで王朝の絵巻物ふうを展開する大長編。ここに掲載した箇所にも花見という伝統的な行事が描かれており、京都の文化と地理にふれることができる」とある。王朝絵巻物ふうのひとつのクライマックスが抜粋された花見の箇所で、現代の一般的な花見とは趣を異にする。この花見の場面を作者の意図に沿うように読むには、この小説の全体を知らなければならない。また、桜に関する短歌、幸子と貞之助の短歌も重要な学習事項になろう。したがって

### I 長編小説「細雪」の概要

#### II 花見の場面

#### III 短歌

の三つの柱をたて、教師用マニュアルとして、また多少の作品分析も付け加えて書くことにする。

### I - a 執筆の動機・意図・時代背景

「細雪」は作者自身の創作余談（別冊「文藝春秋」昭31）に次のように述べている。「書き出したのは 昭和17年であるが、あの腹案は前からあつた。実は阪神間を舞台にした一種の風俗絵巻のやうなものを書いてみたいと思つて」最初は「芦屋の不良マダムの話を入れる筈だつたが時世がだんだん陰しくなつて一切書くことが出来なくなつたので極く甘い物になつてしまった。」「中央公論」に2回発表するが、右翼系が攻撃するので中止、昭和18年に私家版として200部、非売品として上巻を出す又警察が来た。「別に戦争反対の意見をかいてゐるわけでもないし、不良マダムのやうなところはみんな取つてしまつて家庭的な話だけを書くぶんには差支えないだらうと考へて書いたが、それでもいけなかつた。とにかくお花見だとか、(略) お花見にどういふ着物を着て行つたかとか (略) 華やかな世界が沢山出て、剛健なものが全然ないのがいけなかつたらしい」。言論統制が、谷崎の世界、それも不良マダムの話など書かなくても規制される時代であつ

た。谷崎は昭和10年から「源氏物語」の現代語訳に取り組みその余韻から「細雪」が構想されたから“王朝の絵巻物風”と称される。谷崎ファンには戦時色の濃くなった中で、束の間の安堵を感じる世界を提供してくれたという（伊藤整、野村尚吾）。「あの時分には他に用が無いから書くのには都合が良かった……下巻の大部分は終戦後書いた。」（「細雪」成立については、東郷克美『異界の方へ』1994有精堂に詳しい）

## I - b あらすじ

蒔岡家は船場の旧家。長女鶴子と婿辰雄が没落しかけた本家を継ぐ。次女幸子は婿貞之助を迎えて分家し、三女雪子四女妙子も本家より居心地がよく、同居している。雪子は30歳になるが未婚のために、妙子も結婚できない。妙子は趣味が嵩じて人形つくりを“仕事”にする自由な女性で25、26歳。雪子の見合話がこの小説の主流をなす。見合いに条件はつきもので、雪子側から見て①家の格 ②資産 ③月給 ④将来性 ⑤外見 ⑥遺伝性などが判断の材料となる。仲人情報だけでなく自ら人を雇って調査もする。

最初の話は本家の辰雄の口利きで、相手は豊橋の素封家の嗣子。条件は満たしたが、いよいよとなってから雪子が「知的でない」と断った。はにかみやで人前では満足に口が利けなくせに「否」となったら後に退かず周囲を窮地に追い込む。

女は30歳となると条件が下がり、再婚可、子供も二人までなら可、年も貞之助より少し上でも……となる。美容院のマダム井谷から紹介された瀬越はバリ帰りで41歳、見合いもすんでから調査の結果が出て、彼の母が精神病とわかって中止となる。その見合いの時に雪子の「左の眼の縁にほんの微かなシミがあるような気イする」と先方の男たちが言い、仲人が「ほんとうにそんなシミがおりでしょうか」と訊いてくる。幸子は貞之助に数ヶ月前言われて初めて気づいた。本人が気づいているかどうか、遠回しに探ろうという順序だ。女が目でしか気づかぬと思われる「眼の縁の微か

なシミ」を見合いの席で相手の男や付き添いの男が気づき、さらに仲人に訊ねる— 些末なことをなぜ問題にするのか。中公文庫の『細雪』の解説に大阪人・田辺聖子は「女性崇拜の資質のある谷崎さんが、上方に住み、“おんな文化”に目を開き“王朝文化”の根に辿り着いた……取るに足らぬ蒙昧なものと黙殺されてきた“おんな文化”の世界は近代になって初めて谷崎さんというすぐれた通訳を得て雄弁に広められた。その象徴が雪子である」と。

今日の感覚からすれば、雪子は結婚の意志があるのかと思うほど人任せである。父母亡き後は本家の鶴子夫婦が縁談の世話をする役割を担うが、前述のような結果で愛想を尽かし、それ以後幸子夫婦にお鉢が回ったのだ。なににせよ30歳を過ぎてもお蔭岡家の“娘”であるから、毎月本家から雪子、妙子に小遣いが送られる。雪子が生活者の面を見せるのは唯一幸子の娘悦子の面倒見がよい点で、看病など幸子を凌ぐものがあるとされるが、これといった事をしているわけでもない。

一方、末娘妙子は蔭岡家の崩壊を象徴するような人物で、趣味から発した人形制作も自立に結びつく。しかし“品行”も蔭岡家から大きく外れて、金持の坊っちゃんとの家出事件、写真師板倉との交際とその相手の死、そして最後にバアテンダー三好の子を身ごもるという奔放さだ。

雪子は5回の見合いの後、定職を持たぬ華族・御牧との結婚のために上京するところで終わる。昭和11年から16年まで足かけ6年にわたるが、戦争への足音とは遠い生活が花見などの年中行事に象徴される。そこで、花見の場面に移ろう。

## II 本文 花見の場面

「鯛やわ」という関西弁以外に「貞之助におかしがられた」「鯛を好かない」など今なら「おもしろがられた」「鯛が好きでない」「鯛を好まない」などが自然に出る表現で、文脈で読んでいない学生は誤解する場合がある。「鯛」の話は、月並みでは同等の「桜」を導入するためであろう。「古



今集の昔から、何百首何千首となくある桜に関する歌、——古人の多くが花の開くのを待ちこがれ、花の散るのを愛惜して、繰返し繰返し一つことを詠んでいる数々の歌、——少女の時分にはそれらの歌を、なんという月並みなど思いながら無感動に読み過ごして来た彼女であるが、年を取るにつれて、昔の人の花を待ち、花を惜しむ心が、決してただの言葉の上の〔風流がり〕ではないことがわが身にしみて分かるようになった。」末尾の〈注〉に古今集の説明がある。が、基礎的な知識のない人には「七五調の理知的・技巧的な歌風」とあっても内容は伝わらない。続く本文の「古人の多くが花の開くのを待ちこがれ、花の散るのを愛惜して、繰返し繰返し一つことを詠んでいる数々の歌」の例を挙げて古今集の特徴を紹介しよう。

a 比較のために、また基礎知識としてまず万葉集から2首挙げる。(大岡信『私の万葉集一』講談社現代新書 1993)

① あをによし 奈良の都は咲く花の <sup>には</sup>薫ふがごとく今盛なり  
おのの おゆ  
小野 老

「あをによし」は奈良の枕詞。<sup>には</sup>「薫ふ」は赤い色が外に向かって発散する意で後には嗅覚の匂う意にも使われるようになった。

アヲニヨシ奈良の都は、爛漫と咲く花がいつせいに照り映えるように、今を盛りと咲き誇っている。

② 田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にそ 富士の高嶺に 雪は降  
やまべのあかひと  
山部赤人  
りける

「ゆ」は「を通って」の意。「うち出でて」は海上を出ての意ではなく、眼前に障害物のない、展望がぱっとひらけた地点にでたときの感じをいう。

田子の浦を通してひろびろとしたところに出た。見あげれば、たいしたものだ、富士の高嶺に真っ白に雪が降っている。

なお、この歌は上級Ⅱ19ページ 小林秀雄「美を求める心」に解説がある。

- b 花の散るのを愛惜する歌 小沢正夫『古今集』『日本古典文学全集』小学館 昭60

③ ひさかたの 光のどけき春の日に しづ心なく 花の散るらむ  
紀 友則 きのともりのり

太陽の光がのどかに照っている春なのに、その春に背いて散る花は、  
きっとせつない思いで散っているのであろう。

④ 春雨の 降るは涙か さくら花 散るを惜しまぬ 人しなければ  
大伴黒主 おおとものかろぬし

桜の花の散るのを見て、それを惜しみ泣かない人はないのだから、そうすると、しとしとと降る春雨はそれを悲しむ人たちの涙が雨になったものであろうか。

- c 「月並みな」心配 小沢正夫『古今集』『日本古典文学全集』小学館

⑤ 世の中に 絶えて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし  
在原業平朝臣 ありひらのなりひらあそん

およそこの世に桜というものが全くないと仮定したら、春の人の心は本当にのどかでいられるのだが。

- d 花の開くのを待ちこがれる歌 峯村文人『新古今集』『日本古典文学全集』小学館 昭61

⑥ 吉野山 桜が枝に雪散りて 花遅げなる年にもあるかな  
西行法師 さいぎようほうし

吉野山は、桜の枝に花ならぬ雪が舞い散って、花の咲くのが遅そうな年であることだ。

⑦ わが心 春の山べにあくがれて ながながし日を今日も暮らしつ  
紀貫之 きのつらゆき

わたしの心は、桜の花の咲く春の山のあたりにうばわれて、落ち着かないまま、長い長い日を、今日もまた暮らしてしまった。

花の開くのを待ちこがれる歌は、『古今集』にはなかった。万葉の影響もあろうが春を待つ最初の花は、梅である。花の散るのを惜しむ歌は『古今

集』『新古今集』とも大変多い。「雨風につけて昔の人がしたような月並みな心配」の歌は見当たらなかった。

万葉の五七調とは音数律で「あをによし 奈良の都は」「咲く花の にほふがごとく」と5音7音の2句が意味としてひとまとまりになるように順に繰り返す力強い調子。古今集の七五調は③「光のどけき 春の日に」⑤「たえて桜の なかりせば」と7音5音がひとまとまりになるように順に繰り返す流麗な調子（集英社国語辞典）七五調は以来明治の新体詩まで続く。古今集が「理知的・技巧的」である説明のために、ここに挙げた万葉集と古今集の歌をみると、①は咲く花のみごとさに圧倒されたまを②は雪を頂いた富士の美しさに心うたれた感動を素朴にうたっている。しかし古今集の⑤は感動というより理屈であろう。また③は「ひさかたのひかりのどけきはるのひに……はなの……」と韻をふむ技巧の例である。

本文の中に「口にこそ出さね」などの文語表現についても《言語事項》に詳しい。用例・類語など多くあげられ自習・予習に便利だが周辺知識がないと理解がむずかしいところもある。

さて、278ページの\*印の前で花見は終わったようなのに、また場面は神苑である。このつながりの悪さは省略にある。\*印の前は花見の定番の列举で、続いて今年の花見の描写が展開する。クライマックス「紅の雲」に繋がることと、今年も満開のときにそろって来られたことを喜ぶが、幸子は「来年は雪子が嫁に行って、いないのでは」というこの小説の主題のリフレインを欠かせないものと編者が考えたからであろうか。

### Ⅲ 貞之助と幸子の短歌

⑧ 佳き人の よき衣つけて 寄りつどふ 都の嵯峨の 花ざかりかな  
貞之助

⑨ ゆく春の名残り惜しさに 散る花を 袂のうちに秘めておかまし  
幸子

⑩ いとせめて 花見ごろもに花びらを 秘めておかまし 春のなごり

⑧の歌を見て幸子も興がわき⑨のようにまとめたもの。それを見た貞之助が「こう訂正してはというつもりなのでもあろうか」と記された歌。二首を比較すれば、幸子のは五七調で思いをそのまま述べてあるのに、貞之助のは七五調で韻をふみ技巧を凝らしているともいえる。たしかに袂の中に花びらをしのばせておくという着想はおもしろい。その着想をうまく使ってもっと切なく「いとせめて」と始めるところをわざとらしいといえ、万葉調を好む人であり、切なさが増していいと思えば古今調で技巧を重ねずる人といえようか。谷崎が現代語訳した「源氏物語」に短歌は多くあり、実際に松子夫人との歌のやりとりもあった。また、古今集に

さくら色に 衣は深く染めて着む 花の散りなむのちの形見に 紀有朋  
があった。この作品のモデルは、「雪子」は松子夫人の妹重子、「幸子」は松子、その夫「貞之助」は谷崎だが、自身は性格などは別といっている。  
(谷崎松子『倚松庵の夢』中央公論社 昭47)

なお、「細雪」は上巻・中巻・下巻からなり、抜粋部分は上巻十九である。

さて、『上級教科書Ⅱ』には「陰翳礼賛」がある。谷崎の作品に興味があれば「刺青」を読むのはどうだろうか。

「刺青」は処女作で明治42年に発表された短編である。書き出しが「それはまだ人々が『愚』という貴い徳を持っていて、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であった。」という不思議な世界へ連れて行かれる。刺青の名手清吉の宿願は美女の肌はに「己れの魂を刺り込む」こと。4年目の夏真っ白な女の素足を見つけたが見失う。翌年の晩春、使いの者として来た十六か七の娘が偶然そのひとであった。「立派な器量の女にしてやるから」と麻酔をかけ、女の背に巨大な女郎蜘蛛の刺青を施す。「その刺青こそは彼が生命のすべてであった。その仕事をなし終えた後の彼の心は空虚であった。」知覚を回復した娘は「親方、早く私に背の刺青をみせておくれ、

お前さんの命をもらった代わりに、私はさぞ美しくなったろうねえ。」色上げのために湯をあびるのも「美しくさえなるのなら、どんなにでも辛抱してみせましょうよ」しばらくして「苦痛のかげもとまらぬ晴れやかな眉を張って」「親方、私はもう今までのような臆病な心を、さりと捨ててしまいました。——お前さんは真っ先に私の肥料<sup>こやし</sup>になったんだねえ」折から朝日が刺青の面にさして、女の背は燦爛とした。という結びである。

女の魔性、マゾヒズム、憧れの女の前での位置の逆転、美しい足への執着など谷崎文学の特質が出揃っている。文庫本で10ページ程度で、比較的扱いやすい作品である。

この課では、花見の趣を新鮮に感じることができ、短歌に触れ、その基礎的な知識を得、日本の伝統的なこと（家、人間関係、ものの見方、考え方）、そして京都周辺の地理が想像できればいいのではないだろうか。